

故 名誉員 工学博士 那波光雄先生の追憶

故那波光雄先生が、明治 26 年東京帝国大学工科大学土木工学科を卒業せられてから、終始一貫高潔な人格をもつて、技術家の本領を發揮せられ、昭和 35 年 4 月 1 日 91 才の天寿を全うされましたことは、私共一代の師表として、景仰措く能わざるところであります。

ここに先生の遺業の一端を追憶して、追悼の詞に代えたいと思います。

先生は明治 2 年大垣に生れ、夙に俊秀の誉れ高く、明治 26 年優等の成績で大学を卒業、直ちに恩師白石直治博士の招請に応じて、関西鉄道株式会社に入社、明治 32 年京都帝大に転出されましたが



を命ぜられ、ベルリン工科大学に於て、カウエル教授に親炙し、同教授の愛弟子として、勉強されました。これは後日談となりますが、その時から 20 年の後の大正 11 年に日本の主席代表として、ローマで開催された国際鉄道会議に出席の帰途、ベルリンに立寄り、カウエル老教授を私宅に訪問せられ、かつまた、ホテル・カイザーホーフの晩餐に招待されたとき、当時日独における鉄道工学の最高権威として、師弟敬愛思慕の情操の発露は、まことにうるわしき劇的シーンであつたのであります。

明治 35 年独乙から帰朝、同年 12 月京都帝大理工科大学教授に任ぜられ、37 年 4 月工学博士の学位を授けられ鉄道工学の講座を担任して居られましたが、39 年 8 月依願免官の上、九州鉄道株式会社に入社、41 年 4 月帝国鉄道庁中津建設事務所長、44 年 7 月鉄道院大分建設事務所長として鉄道の建設に従事し、その間、わが国初期の鉄筋コンクリート構造物として、水路橋の建造、橋台橋脚の築造にコンクリートの採用、起重機による橋桁の架設法の新案並びに実施、防潮堤の建造等、新技術の推進に努力し、その成績の見るべきものがすくなくなつたのであります。

その後大正 4 年 6 月鉄道院工務局勅任設計課長として、東京に栄転、6 年 10 月には東京帝大教授を兼任、鉄道工学講座を担当、8 年 6 月総裁官研究所長に栄進、大正 15 年 5 月退官されたのであります。この 11 年間は、極めて多彩の局面打開に努力された時代でありまして、思ひ出多い先生の面目の躍如たるものがすくなくないのであります。就中、鉄道建設規程の改訂、国産資材による信越線アプト線の改築、青函連絡の本格的設計、白川橋梁の支間 300 呎の鋼アーチ橋の設計、研究所の拡充に伴う 200 t 万能試験機の設置、大正 12 年関東大震災の鉄道震害調査書の発刊、各種多数の標準設計並びに参考設置の制定等は特に顕著な事項であります。

これ等数々の功績により昭和 17 年には鉄道大臣から感謝状を受け、30 年には運輸大臣より交通文化賞を受けられたのであります。

先生は大正 15 年退官後も昭和 11 年迄大学講師として、鉄道工学の講座を担当せられ、前後 23 年の永きに亘つて、多数の技術学生を訓育されましたことは、先生の業績として忘れることの出来ない思ひ出の一つであります。

土木学会に関しては、その創立当時から、熱心なプロモーターとして第二代編集委員長として、又昭和 6 年には会長として、終始学会の興隆に寄与せられました。特に昭和 17 年発刊せられました「本邦土木と外人」は先生が委員長としてなされた、昭和 13 年からの特別な努力の成果にほかならないのであります。

昭和 31 年 10 月 1 日、多数の有志相会して、先生の米寿を祝福したことも、つい昨日の様な思ひ出であります。今日先生の訃音に接し、哀惜の情まことに切なるものがあります。ここに先生の残された数多い偉大な足跡を追憶し、謹んで先生の冥福を祈る次第であります（原文のまま掲載）。

その間に当時極めて困難な工事と考えられて居りました揖斐川橋梁架設工事の主任技師として、非凡の技能を發揮されたのであります。

同橋は 200 呎 15 連 120 呎 1 連の大橋梁であります。その中の 120 呎のトラスは先生の設計によるものであります。また同橋の架設地点は、所謂柔弱地盤で、橋脚はすべて沈井工法によつて築造されたのであります。この大工事の達成によつて、先生は早くも、橋梁の上部構造並びに下部構造の設計並びに施工に関する大要を体得されたのであります。

明治 35 年には京都帝大から、鉄道工学研究の爲め、独乙に留学